

真山青果「国定忠次」関係資料をめぐって

―「国定忠次（続編）」とその直筆原稿について―

大貫 俊彦

*キーワード

真山青果・国定忠次・続編・戯曲・本文の変遷

一、はじめに――「国定忠次（続編）」の位置づけ

真山青果が上州佐位郡の俠客国定忠治を題材にして書いた戯曲は二つ知られている。天保の大飢饉に苦しむ百姓を目の前にして無職渡世で暮らす自分に疑問を投げかけた「国定忠次」と、その出来事から数年後、討手から逃れて放浪する忠次が訪れた下都賀郡壬生を舞台に、時代に翻弄される家族の縁を描いた「続国定忠次」であり、ともに昭和七年に雑誌『富士』に脚本が掲載、上演された。⁽²⁾ 両作品の本文は『真山青果全集』⁽³⁾で読むことができる。

本稿の副題に掲げた「国定忠次（続編）」とは、いま挙げた二作のうち「続国定忠次」とは別のものを指す。まずはこの「国定忠次（続編）」がいかなるものなのか、その位置づけを確認するところからはじめよう。

「国定忠次」および「続国定忠次」の初出に関する情報については、昭和五十一年に新たに解題と備考を付けて復刻した『真山青果全集』第五巻の記述に誤りがあり、これ以降、昭和五十三年の同全集別巻『真山青果研究』の「真山青果著作年表」⁽⁴⁾、平成三年の『近代文学研究叢書』⁽⁵⁾における「真山青果」の「著作年表」、平成六年の野村喬『評伝真山青果』⁽⁶⁾のなかの「真山青果著作年表」でもこの誤りを踏襲している。初出の詳細な情報については次節で整理することにして、ここでは「国定忠次（続編）」に関わる要点を簡単に述べるが、第一作目の「国定忠次」が『富士』に掲載され、大詰の第四幕目が完結した直後、同じページに「続編」としてその第一幕が載っている。このことについては『真山青果全集』の「解題」にも言及があり、そこでは次のように記されていた。

雑誌には、この四幕二場の後にもう一場、天狗面をかぶった農民が

たくさん出る場面が付いていて、これは続編につづく冒頭部分と思われるが、その後あらためて着稿された続編のプロットは全く新規に考案されたため、この部分は全面的にカットされてしまった。

(綿谷雪「解題」『真山青果全集』第五卷、昭和五十一年七月)

本稿で取り上げる「国定忠次(続編)」とは、この「カットされてしまった」部分であり、引用にもあるように二作目の「続国定忠次」とは別の内容である。この「続編」は最初の第一幕が掲載されたところで中断となり、翌月からは時と場所を大きく変更した別の忠次の物語がはじまる。この変更後の作品が「続国定忠次」である。以上のような経緯や、完結していないこともあつてであろう、最初の『真山青果全集』で省略されたから復刻版でも収録されず、現在は初出の『富士』を見るよりほかはないのだが、この初出誌も所蔵図書館が限られており、容易には見られないものになっている。

ところで、初出には「続編」とだけ記されているこの部分を本稿で「国定忠次(続編)」と表記する理由は、後に紹介する資料にこのように記されていること、そして内容を変更した作品を「続編国定忠次」(初出時は「続国定忠次」という表題で『富士』に掲載)として青果自身が区別していたことによる。

現在、星槎ラボラトリーが所蔵している「真山青果文庫」の「国定忠次」関連資料を用いて少しずつ進めている一連の研究のなかで、今回取り上げるのはこの「国定忠次(続編)」である。本作においても関連資料が

保管されており、青果の改稿過程を知ることができる。ただ前号^②で取り上げた「国定忠次」の場合は、資料の種類・分量ともに多く、段階的な改稿過程をたどることで青果がどのように脚本を練り上げていたのかを捉えることができたが、本作の場合は、ほぼ清書に近いカーボンコピー資料と直筆原稿があるのみで、しかも直筆資料は一部分しか残っていないことから、大きな執筆の流れを掴むというよりは細かい部分を整理していくということになる。

さらにもう一つ付け加えれば、この「国定忠次(続編)」を取り上げるにあたり、前稿と状況が大きく異なる点は、肝心の本文が普及していないということである。青果研究の本分としては、煩瑣な字句の修正を一つ一つ点検するよりも内容を明らかにすることの方が優先されるべきであろうし、実際にその方が有益だと思われる。そこで本稿では、真山青果の基礎研究として細かい改稿過程も見えていくが、内容の紹介にも重点を置き、末尾には初出の本文に近いカーボンコピー資料を全文翻刻する。

二・初出情報の整理

前節で述べたように『真山青果全集』第五卷の解題と備考には初出に関する情報に誤りがある。まずはそれを初出の『富士』を参照して訂正する。

「国定忠次」

・戯曲「国定忠次」真山青果（鴨下晁湖 画）『富士』第五卷第八号、昭和七年八月一日。二七六～三〇〇頁。内容は「第一幕」。

・戯曲「国定忠次」真山青果（鴨下晁湖 画）『富士』第五卷第九号、昭和七年九月一日。一三〇～一五九頁。内容は「第二幕」と「第三幕」。

・戯曲「国定忠次」真山青果（鴨下晁湖 画）『富士』第五卷第一〇号、昭和七年一〇月一日。内容は「国定忠次」の「第四幕」が三九〇～四〇五頁。「統編」の「第一幕」が四〇五～四一八頁。

第五卷の解題と備考には、青果の「国定忠次」は『富士』昭和七年の八月と九月の二回に分けて掲載されたとあるが、正しくは三回である。最初の八月号には「真山先生のプランによりて」と鴨下晁湖によって記された舞台の挿絵が一頁目の上段を飾り、本文中にも晁湖の挿絵が挟まれる。また九月号の「第三幕」では左團次が扮する忠次の舞台写真が二葉挟まれている。繰り返すが本稿で取り上げる「国定忠次（統編）」は、一〇月号に掲載された「統編」である。本作は青果が途中で執筆をやめており、完結していないことから、項目としては独立させなかった。ついでに「統国定忠次」も整理しておく。

「統国定忠次」

・戯曲「統国定忠次」真山青果（鴨下晁湖 画）『富士』第五卷第一一号、昭和七年一二月一日。三六四～三九〇頁。内容は（誌面には）「第二幕」

と表記があるが）「第一幕」。

・戯曲「統国定忠次」真山青果（鴨下晁湖 画）『富士』第五卷第一二号、昭和七年一二月一日。四四四～四八三頁。内容は（誌面には）「第三幕」と表記があるが）「第二幕」。表題のところに「（十一月東京劇場上演）」と記されている。

『真山青果全集』には「統国定忠次」は同年の一〇月と一二月に掲載されたと記されているが一一月と一二月の誤りである。さらに初出の状況についても附言すれば、一二月号の「統国定忠次」は紛らわしいことに「第二幕」として始まっている。内容を読まなければ一〇月号の続きであると読者は受け取るだろう。しかし「真山青果文庫」のカーボンコピー資料（青果の直筆原稿を筆耕者が書き写したものを確認すると、「第一幕」として書き出されているのである。なぜこのような表記になっているのかは現在のところ分からず、あくまで稿者の推測であるが「国定忠次（統編）」の第一幕がすでに『富士』の一〇月号に掲載されており、編集側で前号との整合性を合わせるためにこのように記載したのではないかと考えたが、詳細は不明である。

三．「国定忠次（統編）」の概要

それでは「国定忠次（統編）」の第一幕がいかなる内容なのか、以下に概要を記す。

天保八年八月一六日頃の夕刻、国定忠次らが関八州の代官所役人の討手から逃れるべく、赤城山中に立て籠もっている最中のこと。岩鼻の代官所を襲撃した忠次一党によって御蔵中の米穀が略奪され、館も焼失するという憂き目にあった岩鼻代官林部三右衛門は忠次を捕らえるべく、上州前橋連雀町にある旅籠屋油屋に大本営を張っていた。代官所の下役らは、一ヶ月あまりも赤城山を取り巻きながら一向に忠次を召し捕れないでいることや、近在の百姓たちが忠次に同情し、場合によっては一揆を起こしかねない氣勢になっている状況を苦慮している。そこに衣服の乱れた代官所書役の宗川が這々の体で帰ってきて、天狗の面をかぶった徒党が代官所（旅籠屋油屋）に向かっていることを告げる。急いで武装した役人達を前に、青天狗・赤天狗を頭とした百姓の扮する集団が現れ、忠次に罪を問わないようにと訴え出る。役人と天狗組がもみ合うなか、烏山の代官竹垣次郎佐が馬に乗って駆けつけて場を鎮め、百姓らの嘆願を聞き届けようとする〔その一〕。

その騒動の後刻、同じ油屋の奥座敷では町芸者を集めて代官の林部が酒盛りをしている。その様子を用人の権田が心配そうに見守る。さらに敷居際には今にも忠次が山から逃げ出しそうだとの情報を得た三室の佐與松が忠次を捕らえるべく代官の下知を待っている。しかし林部はまったく動こうとしない。急ぎ立てる権田と佐與松に林部は、昨朝忠次の元妻お豊に毒酒を持たせた一件を思い出させ、あの計略は忠次に毒を呷らせるためではなく、忠次の心中に動揺を与えるのが目的なのだと説く。お豊の訪問による忠次の動揺と迷いこそが真のねらい

であり、その結果、忠次が落ちのびて関所破りをしたならば、いよいよ罪は重くなり、天下の罪人となって日本国中に身の置き場がなくなる。そうなるように忠次を追い詰めているのだと言う。そこに手廻りの若侍谷川がやってきて、江戸送りの大罪人須坂の源兵衛の唐丸籠が安中を通過したことを伝える。林部は護送される罪人の源兵衛を釈放し、忠次を捕らえるために利用すると述べる〔その二〕。

一読して明らかのように「国定忠次（続編）」は、前作「国定忠次」の文字通りの続きである。前作の第四幕は天保八年陰曆八月十五日の夜のことであり、毒酒を呷った円蔵とお豊の遺言を忠次が聞き入れて赤城落ちを決意するところで終わるが、その末尾に続く翌一六日の物語が「続編」になる。したがって舞台の背景や人物の多くが前作を引き継いでいる。

「続編」の第一幕でクローズアップされるのは代官林部であり、前作では養寿寺にいた忠次に「関東取締出役の手代がはり」にならないかと誘いに来た人物である。忠次はそれを断るが、その際に林部は自分も大飢饉に苦しむ百姓のために奔走しており、江戸の呉服屋を説得して八千両の大金を年賦で借り上げ、その金を糸市場につき込んで百姓達を救済するのだと伝える。忠次は林部の発言に感心するが、実はその金は代官所と問屋、機屋を潤すためのものであり、百姓には行き届かない仕掛けになっていることを浅二郎の言葉によって気づく。そして百姓を救うために忠次は襲撃を決意し、実行した結果追われる身となり、一党を引き

連れて赤城山中へ立て籠もる。その忠次たちが動く気配を見せるなか、林部のさらなる策略が「続編」の第一幕で明らかにされる。もともと林部は前作でも狡猾な人物として描かれていたが、「続編」ではさらにそれが強調されている。

また、百姓たちが扮する「天狗組」も前作「国定忠次」を踏まえたものであろう。飢饉に苦しむ百姓の家々に金が投げ込まれ、忠次の仕業だと思つた百姓が（実際は忠次ではなく子分浅二郎の行動であつたのだが）忠次に罪が及ぶのを避けるために「天狗さまのお恵みだ！」と言う第二幕の一場面、また忠次自身も第三幕で江戸近江屋の飛脚が積んだ三千両を強奪し、さらに岩鼻代官所を襲撃して貯蔵する米穀を略奪したのち、近辺の村に「天狗さま」からだと言つて子分たちに配つて回らせる。続編ではその「天狗さま」に苦しい生活を救われた百姓達が、天狗の面を被つて忠次の捕縛をやめるように代官所へ訴え出る。「天狗」とは、前作では公には示せない忠次一党の百姓に対する志であり、「続編」では百姓たちの忠次への思いを具現化したもの（上州一円百姓どもの念願）として表現される。騒動を止めに来た烏山の代官竹垣次郎左はその百姓たちの思いを聞くように、仮面を外そうとする百姓たちの行為を止めるが、そのふるまいにも竹垣が「天狗」の面の意味を理解していることがわかるだろう。そしてこの竹垣が百姓に理解のある裏表のない若代官として描かれるのと対照的に、林部三右衛門の老獪さが際立つという人物の配置になっている。

「国定忠次（続編）」は第一幕で終わっているが、短い内容のなかにも

後の展開を暗示させる要素が含まれている。まず一つ目が先に触れた代官林部の策略であり、大罪の免除と引き換えに忠次を捕らえる役目を担わせる「信州で悪と呼ばれた須坂の源兵衛」への言及である。前作からの流れを受けながら林部が忠次について「わしは彼を日本全国の罪人として彼を憎みたい、彼を罰したい」と発言する場面があるが、代官としての立場を超えた林部の私怨が籠められている。

青果はなぜ、この「続編」の第一幕を公にしながら内容を変更したのだろうか。その理由については現在のところ何も分かつていない。ただ、中断された「国定忠次（続編）」の内容を読む限りでは、第一幕には忠次を追い詰める策略と実働という二つの「悪」が登場しており、いかにも通俗な物語を予感させるといふ印象が拭えない。前作の「国定忠次」は、忠次の内面の葛藤を主題とした一つの作品として完結していたが、この「続編」は前作で印象深く描かれた「腕組みをする忠次」に悪代官林部が付け込むという展開になっており、このような物語が逆に前作の際だった特色を台無しにしてしまう可能性も備えている。評判だった前作「国定忠次」への影響を避けるという点でも、路線変更という判断は正しかったのではないかと思われる。

ところで「国定忠次（続編）」が持っていた諸要素はその後、どうなったのであろうか。時代も場所も異なる「続国定忠次」と関連づけるのは軽率かもしれないが、「国定忠次（続編）」と「続国定忠次」の関連性を考える手がかりになると思われるので、少し二つの作品についても触れてみたい。

まず「国定忠次（続編）」で討手から逃走する忠次を付け狙う者として出てくる須原の源兵衛と似た立ち回りを「続国定忠次」で担うのは、忠次の腹心武井の浅二郎である。忠次とは縁のない極悪人として突如登場した源兵衛とは異なり、「続国定忠次」では、忠次の側近として登場する浅二郎が忠次を付け狙うという展開になっている。そして浅二郎をそのように行動させるために、彼に偽物の手紙を送り、家族の命を盾にとって罠に陥れたのが、忠次の好敵手である島の伊三郎である。策略を練って忠次を追い詰める「国定忠次（続編）」の悪代官林部の役割を「続国定忠次」では伊三郎が担っていると言えよう。ただし「続国定忠次」においては、あくまでこれらの人物は物語を展開するための働きにすぎず、全体を通して浮かび上がってくるのは、浅二郎の伯父彌惣次と彼の孫である與吉の家族、浅二郎とその母おしもと妹おみわの家族、そして忠次と寅次の親子関係をめぐる主題が中心となっている。

忠次の息子寅次が登場する「続国定忠次」にはまだまだ取り上げるべき要素があるが、「続編」との関係において以上の二点を指摘しておくたい。

四 「国定忠次（続編）」関係資料の整理

続いて星槎ラポラトリー内にある「眞山青果文庫」が所蔵する「国定忠次（続編）」に関わる資料を紹介する。現在、三点の所在が明らかになっている。

・【カーボンコピー資料Ⅰ】〔函架番号 068〕

「国定忠次（続編）」／油屋勘兵衛店頭／同 奥座敷」と表紙に朱筆で記されているもの（図版①）。紙縫り綴じ。本文三六枚。相馬屋製原稿用紙にカーボンコピーをしたもの。カーボンコピーの清書は筆耕者が行っており、その筆跡から「国定忠次」と同一人物であることがわかる。内容は『富士』に掲載された第一幕をすべて収める。書き入れ等はない。



図版①

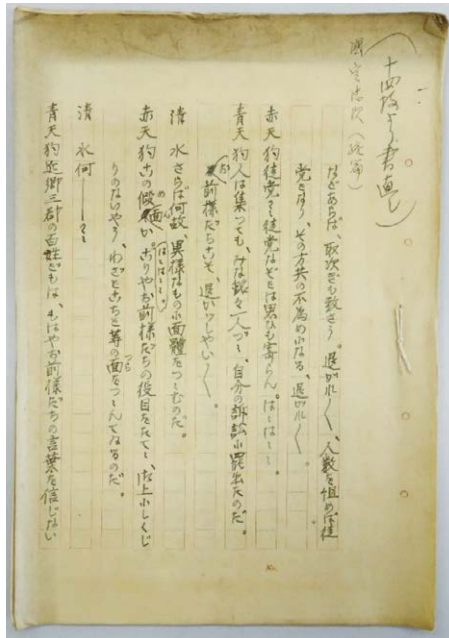
・【カーボンコピー資料Ⅱ】〔函架番号 068〕

和本仕立てのものだが、厚紙の表紙に原稿用紙を挟み込むのみで綴じられていない。表紙に題簽や題名の書き込み等もなく、本文にあたる原稿用紙には製本の穴も空いていない。本文三〇枚。相馬屋製原稿用紙にカーボンコピーをしたもので、先の【カーボンコピー資料Ⅰ】と同じ

ものであるが、本文の色は前者よりも濃い。一丁から三〇丁まであり、三二丁から末尾までを欠く。こちらでも書き入れ等はない。

・【直筆資料】「函架番号068」

「国定忠次（続編）」直筆原稿。亭々居稿本の原稿用紙、紙縫り綴じ（図版②）。一四枚。本文の筆記はペン。用紙一枚目の右肩に「（十四枚より書直し）」と記す。内容は、油屋の代官所に押し寄せた天狗組と手付下役の清水が言い合いになるところから第一幕の末尾までである。第一幕の半分の分量にあたるが、その中にもわずかに落丁がある。



図版②

「国定忠次（続編）」は完結していないこともあってか、前作「国定忠次」やこの後に執筆する「続国定忠次」のような私製の製本版はなく、紙縫りで簡単に綴じられたものが残っているのみである。三つの資料の関係

は『富士』掲載の第一幕をすべて揃える【カーボンコピー資料Ⅰ】、同じものだが最後の数丁を欠く【カーボンコピー資料Ⅱ】、そしてその前段階にあたる青果直筆の【直筆資料】という位置づけになる。これまでに稿者が調査を通して「眞山青果文庫」にある様々な戯曲資料を見た限りでは、おそらく本来はこれらの他にも全体の構想や場面の展開を練ったメモ、レポート用紙に書いたこれより前の段階の草稿資料もあった（あるいはある）と思われるが現時点では見つかっていない。

五. 【直筆資料】にみる改稿過程

以下、ここからは青果の改稿過程を知ることのできる【直筆資料】をもとに「国定忠次（続編）」の修正箇所をすべて点検する。資料としては先述の通り草稿資料が一種類と、初出とほぼ同一の【カーボンコピー資料】があるだけで、草稿も「国定忠次」に見られたような大きな加筆や修正は見られず、細かい字句の修正が多い。本稿を執筆するにあたって、資料を調査したうえで先に結論を述べれば、これらの細かい加筆や修正から、青果に特有の執筆の特徴が新たに判明するということはない。ただ、前稿では改稿過程の大きな変化を捉えるために細かい表現の修正の大半は省略してしまったことが心残りであったこと、幸い本稿では修正箇所がそれほど多くはないことから、青果の書き癖、表記ミスも含めて細かい部分を追ってみた。

凡例

・底本は「函架番号068」の【直筆資料】を用いる。範囲は【カーボンコピー資料Ⅰ】の丁数でいう、一四丁目から第一幕の末尾までとし、青果による修正や書き損じがある箇所を枠のなかに引用する。前稿に倣って引用部分の一行目にはページ数（本文が『全集』には収録されていないので、本稿の末尾に翻刻するカーボンコピー資料の丁数）を記載し、両者を対照できるようにする。

・句読点、濁点は資料の原文に従う。

・資料のなかの旧字や崩し字は通行の字体で表記する（なお人名「佐與松」は【カーボンコピー資料】および初出では「佐與松」と記されているため末尾の翻刻では「佐與松」と表記したが、青果の原稿には「佐与松」と記されていることから「与」の表記を用いることにする）。

・引用に際し、稿者が本文を途中で省略する場合は「（中略）」「（後略）」のように二重括弧「（ ）」で表記する。この記号は原資料にはない。

・資料にある「削除部分」の表記——角括弧に丸ゴシック、削除線を引く（〔丸ゴシック〕）

・資料にある「加筆部分」の表記——山括弧にゴシック（〈ゴシック〉）
・判読できない抹消部分の表記——一文字につき■を一つ記す。

なお【直筆資料】の分量は「第一幕」の約半分に対応するが、三〇丁目の後半にあたる部分が欠落している。

それでは以下、資料の本文を引用し、修正箇所を点検する。また適宜、草稿を読み、気づいた点に短い解説を付けながら進めていく。

引用1【直筆資料】（【カーボンコピー資料Ⅰ】の一四丁目に相当）

赤天狗 徒党？徒党なぞとは思ひも寄らん。は、は、は、。

青天狗 人は集つても、みな銘々一人づゝ、自分の訴訟に罷出たのだ。〔■〕へお、前様だちこそ、退かッしやい〜。

清水 さらに何故、異様なものに面体をつゝむのだ。

赤天狗 この仮〔■〕〔面〕か。へは、は、は、。こりやお前様だちの役目をたてゝ、御上にしくじりのないやう、わざとちと等の面をつゝんてゐるのだ。

清水 何——？

青天狗 近郷三郡の百姓どもは、もはやお前様だちの言葉を信じないのだ。この仮面をはずして一々〔■〕に理〔■〕〔道理〕を責立て「たち〔■〕へられたら」、お前様だちの役儀も立ちますまい。は、は、は、。

【直筆資料】は、第一幕「その一」の後半、「天狗組」の一角が油屋に押寄せ、役人と言ひ争いをするところから始まっている。引用1には一四丁目にあたる部分から、修正が見られる前後の部分を抜粋して記した。二箇所ある■は、文字（筆跡からおそらく漢字）を途中まで書いて修正したものであるが判読できないため不明とした。なお、このように文字を最後まで書かずして修正していることも多いが、判読できるものも

あるのでその場合は文字を起こしてある。

引用2【直筆資料】（「カーボンコピー資料I」一五丁目）

赤天狗 触らぬ神に祟なし、引込んでござる方が好からう。は、は、。

（中略）

青天狗 国の「作」十「掟」も御仕置も、民百姓があつてのことだ。

国中青草の根を枯らして、何が御代官だ、お役人だ。

赤天狗 忠次どんを殺さは皆殺せ、百姓とも皆殺せ！

群集一同も同音に声を上げ、「殺せ〜、皆殺せ。」

など殺気立ちて叫「ぶ」へび〜一同門内に闖入せんとする。

清水 これ心得違ひをしてはならん。嗚訴ごうその罪は重いぞ。

前稿でも少し触れたが青果の草稿資料には、平仮名に濁点がないことがしばしば見られる。最初の赤天狗の科白「引込んでござる」、「二つ目の赤天狗の科白「殺さは皆殺せ、百姓とも皆殺せ！」は筆耕者によって」に「殺さは皆殺せ、百姓ども皆殺せ！」と清書時に濁点が施されている（なお、引用1の「つ、んでゐるのだ」もこの例である）。平仮名が前後逆になっていたりすることもあるが、これらは筆耕者がカーボンコピーをする際に整えていると思われる。

引用3【直筆資料】（「カーボンコピー資料I」一六丁目）

宗川 罪人を出してはならん。嘆願は取次く、さあ引け〜。

（清水）

清水、宗川、他の下役等と共に制止すれとも農民等は聞かず、門前に殺到して相争ふ時、上手の同心組の方より四五発の砲声聞ゆる。農民鉄砲の音に聞き「そら鉄砲だ」「怪我するな」「撃たれるな」など口々に叫んで一時は散々に逃げ出したれど、その「■」に「う」ちに一人二人不審さうに立止まる者あり、上手同心組の情勢より察して「■」威嚇の空鉄砲たるを察したるなり。

宗川 さ、引け〜、引かッしやい。必ず悪うは計はない。

同じく最初の宗川の科白「取次く」、次のト書きの「制止すれとも」は筆耕者によって「取次ぐ」、「制止すれども」と濁点が付けられている。気になるのは同じト書きの「鉄砲の音に聞き」の箇所であるが、ここを筆耕者は「鉄砲の音に驚き」と直している。草稿の「鉄砲の音に聞き」は、例えば「鉄砲の音を聞き」でも文意は通るので、草稿のどの部分を誤りと認識して直すのが難しいところであろう。前作「国定忠次」では筆耕者が写したカーボンコピー資料に青果がチェックを入れるという形跡も見られたが、本稿を執筆するにあたり参照している「国定忠次（続編）」の資料にはそのような跡はなく（もちろんカーボンコピー資料は複数作られるので、青果の朱の入った別の資料が存在する可能性も残されては

いるが)、このような筆耕者の直しの多くがそのまま初出の本文となっている。

引用4【直筆資料】(「カーボンコピー資料I」一七丁目)

青天狗 うむ、嚇しの空鉄砲だ。役人どもの腹は知れてぞ。

赤天狗 (大声に) 遁げるなく、みな引返せ。今のは嚇しだ、**中** **折** **子** **鉄** **砲** **だ**。返せ、引返せ!

〈案山子〉鉄砲だ。返せ、引返せ!

青天狗 相手の腹は読めてぞ、みな引返せ、戻せ!

群集空鉄砲と聞いて「又又急」に元気づき、わつと叫んで引返し来る。

宗川、清水その他、声を嗶らして制止すれども、農民等は凶にのりて聞かず、油屋の店頭又は冠木門より家内に侵入せんとして乱闘する。石岡、天田等の率ゆる鉄砲組はその暴状を見かねて駈け来り、道路に敷いて筒先を暴民等に向ける。

石岡 引け、**中** **折** **子** **鉄** **砲** **だ**。引かぬと撃つぞ!

ト書きの■は木偏のようなものが部分的に見えるが不明である(「折か)。石岡の科白は抹消部分に「百」の字が見えるが、これは「引け、百姓ども」と書こうとして「一揆」に直したのであろう。

引用5【直筆資料】(「カーボンコピー資料I」一八丁目)

赤天狗 引かれるものなら、その引金を引いて見ろ!

同心組、百姓等の劍幕に驚きて手を下しかねてゐる所に、烏山御代官竹垣次郎左、乗馬を走らせ駈け来る。次郎左、二十七八歳、**中** **折** **子** **鉄** **砲** **だ**。清秀の若侍なり。半付半被の口取馬丁それに随ふ。

竹垣 (馬上より大声) これ、街道を騒がして何事だ。鎮まれ、鎮まれ、陳状があらば聞届けよう、一同鎮まれ、皆鎮まれ!

烏山の若代官竹垣次郎左が登場する場面である。竹垣は青果の作中において、この「続編」の第一幕にのみ登場する人物であるが、大正八年の行友李風『極付国定忠治』では竹垣三郎兵衛として、本作の悪代官林部三右衛門に相当する人物として登場する。

引用6【直筆資料】(「カーボンコピー資料I」一九、二〇丁目)

青天狗 騒動ではござりませぬ、御願の者でござります。

群集一同も竹垣を見て、や、や、乱暴を差扣ゆる。

竹垣 例へ嘆願にもせよ、人数を組めば不逞の罪に陥るぞ。支

配違ひながら竹垣が参り合する以上、決してその方共の念願を疎略には聞かぬ。**中** **折** **子** **鉄** **砲** **だ**。理をもつて訴出づれ) ば、条理をもつて聞届け得さするぞ。上の御「悲」は広大だ。騒ぐな、鎮まれ、云へ、聞かふ。

竹垣、ヒラリと馬より飛下りて中央の床に

に腰掛ける。百姓等は互に囁き合つて、何か相談する模様なりしが、やがて惣代三名を選びて「竹」怖々と竹垣の前に進み出て、顔をつ、みし仮面を取らんとする。

竹垣

いや、苦しくない、その俣く。決してその仮面は取るな。

竹垣も小人、人間としてその方共の顔を見れば、或は愛憎の念を「出中」(生)じて、依怙のさばきを致すかも知れぬ。

《後略》

竹垣の一つ目の科白「上の御」の下の文字は漢字の書きかけであるが「恵」と判読でき、「慈」に修正している。ト書きの中の■は月偏のみ書いてある。「《後略》」以降も竹垣の科白は続くが修正はなく、二〇丁目の地の文「一同平伏して」の上部(発言者の名前を書く欄)に「一同」と途中まで記して抹消しているのみである。以上が第一幕の「その一」である。

引用7【直筆資料】(「カーボンコピー資料I」二〇、二二丁目)

《前略》正面床間には鵬齋らしき大幅の軸をかけ、なまなま棚飾りも相応し、■(陣)屏風など置けるさま、小大名の宿■(陣)らしく見ゆ。縁側あり、上手は「母屋」(店頭)に通じ、下手に鉢前の石あり。
《一行アキ》

道具廻り来る——室内には杯盤狼藉と取散らし、代官林部三右衛門は町芸者など集めて、午後よりの酒「中」(宴)に耽りゐたる「中」(さま)なり。

《中略》

時は薄暮。座敷に林部の姿を見ず、町芸者お袖は手水鉢の前に手拭を持ちて立ち、女中お吉は取散らしたる膳部など片付けゐる。

《一行アキ》

佐与松

(空合を見上げ) 最早や日が暮れます 《後略》

第一幕目の「その二」のト書き部分である。一つ目の■は漢字のようであるが数画のみで判読できず。二つ目の■は車偏のみ記す。なお二箇所ある「一行アキ」は、ともに赤鉛筆を用いて記してある。

引用8【直筆資料】(「カーボンコピー資料I」二二丁目)

権田 佐与松。おぬしも見る通りで……、中何ん(大如何)へい
かん)とも困つたよ。
佐与松 然しこの場合……、忠次が万一、野州なり信州(路)なり国越えを致しましたら、それこそ御支配様の御手落になりませう。御油断は時(中)にもよると存じます。
権田 (進み出て) 忠次は儘に、昨夜赤城を引払(中)つたに相違)ないな。

佐与松 へえ、間違はござりませぬ。かねて入込いりこさせて置きました

箕輪みのわ百姓の注進もござりまするし、大河の本陣に火をかけて焼払ったのが何よりの証拠で、昨夜深更ふかよるに

裏山越えを致した物と思はれます。

権田 致すといた……道順は深ふか山やま越えだが、

今もつて沼田よりも洪川よりも、それらしい注進が参らぬが……。

最初の権田の科白は第一案が「何んとも」、修正して「如何とも」とし、最終的に「いかんとも」とする。ただ厳密には「如何とも」の「何」の一字が消されずに残っており、草稿からは「何とも」と「いかんとも」の両方を判読できるのだが、筆耕者は「何」を消し忘れと判断し「いかんとも」を採用している。

一つ目の■は足偏のみ書いて「路」と修正する。二つ目の■は門構えか国構えの書き途中のような漢字が書いてあるが判読できず。二つ目の権田の「致すと」の下は、もともとと三点リーダー「……」だったものを、点を繋いでダッシュに修正している。

引用9【直筆資料】（「カーボンコピー資料I」二二三丁目）

佐与松 《前略》 いづれにしても今日一日は、近辺の山中に隠れ

中密ちゆうみつへひそんである■へもの思はれおもます。権

田様、追討おいうちは今「で」へのうちでうちござります、今宵を

過ぐしましては「最中さいちゆうや」彼等かの「中定ちゆうぢゆう」距離あしが伸

権田 それはわれ等も考ふるが……、何うも困つたものだ。

用人権田、当惑さうに思案する時、代官林部りんぶ

「三」右衛門、下手の縁側に姿を顕はしお「袖」へ「

柄杓にて手を洗ふ。元来この林部はわが「才能」

「智謀」へ「才能」に誇りて、他人が諫むるほどそれ

を聞かず、「智」わが智謀を「■」へ「も」てあそぶ性

癖ある人（なり）。

ト書き中の「わが才能」は第一案が「才能」で次に「智謀」（ただし「謀」の字は言偏のみ記してある）に修正しようとし、最終的に「才能」に戻している。二つの■はどちらも平仮名のように見えるが判読不明である。

引用10【直筆資料】（「カーボンコピー資料I」二二四、二五丁目）

林部 佐与松。まだ小田原評定か。は、は、は、。さ、上つて酒

の相伴でもせぬか。（芸者を見て）お袖も今夜は、少し

自暴やけなことがあつて……、ペロ／＼の神様を踊るさうだ。

へ、は、は、。なあ、お袖。

お袖 え、私……知りません。（林部の肩を打つ）

林「田」部 は、は、は、。さあ権田、おぬしも附合んか。板塀いたべい

に描いた天神様のやうに然う鯉子しよちこばつては、今にその四

角な面が「縫」目から綻びがきれるぞ。は、は、は、
佐与松 殿様、慮外ながら……然やうの場合ではないと存じます。

林 部 忠次の一条か。あれは最早や御用便も同様だ。打遣つて

置けく、は、は、は、。(中座)り、盃を取り) お袖。

芸者お袖、(酌)をする。林部は権田等の屈托

顔を見「へくらべて、面白さうに酒を飲む。

一つ目の■は平仮名「ら」のようにも見えるが不明、二つ目の■は病垂れとその内側に数画書いてあり、「癩」のように見えるが不明とした。林部の二つ目の科白にある「描いた」は、【直筆資料】にはルビがあるが、カーボンコピーには反映されていない(総ルビの初出では付けられている)。

引用11【直筆資料】(「カーボンコピー資料I」二五丁目)

権 田 殿様。(一膝進出て、) さき程、竹垣様がお帰り際の御

一言、(御上)には何うお聞き遊ばしますか知れ

ませぬが……。

林 部 竹垣の言葉? は、は、は、。ありや未だ「若」お若い。は、

は、は、は、。(御)代官学の雛形通りになぞつて「御座

るのだ。あんなことで、撫民の御用が勤まるも

のぢやない。は、は、は、。

《中略》

林 部 それだから斯うして飲んでゐるのだ。お前達には分らん。

(は、は、は、) 打遣つて置け。林部は今日昨日の出来屋

御代官ぢやないのだ。竹垣ぐらゐの鼻主元智恵(先学問)

で、生きた百姓を治められるものぢやない。

■は二文字分あるが判読できず。林部の二つ目の科白は「鼻元智恵」を「鼻先学問」に直す。元の言葉は見慣れないが「鼻元思案」に着想を得た言葉であろうか。権田の動作の「(一膝進出て、)」、林部の二つ目の科白「治められるものぢやない」は、筆耕者によって濁点が付けられている。

引用12【直筆資料】(「カーボンコピー資料I」二六、二七丁目)

林 部 いや、決して相成「ゆん」へりません。は、は、は、。

苦勞致すな。「は、は、は、」。

《中略》

権 田 はい……。

林 部 佐与松。智慧の足らぬお前などに、聞いても「仕」(話

らぬ「顔」(話)だが、忠次が昨夜になつて急に大洞「仕

(の)小屋に火を放ち、一家一党を集めて「山」(赤城)

山を下つたのは、何んのためと思ふのだ。兵糧が尽きた

訳でもない、又、弾薬の尽きた訳でもないらしいのに、

何故に急に「狼」(慌てふ)ためいて、昨夜深更に山

を引払ふ決心を致したのだ。考へたいなら先づその辺から考へ出して見ろへ。」

最初の林部の科白にある「決して相成らん」は第一案の断定的な返事を、丁寧な表現に変えることで一見懇懇に見せながらも裏のある林部の性格に陰影を付けている。■の部分は獣偏のみ書かれているが「狼」であろう。同じ科白内の「又、弾薬なまぐりの」の読点は、直筆には記されているがカーボンコピー資料には反映されていない。

引用13【直筆資料】（「カーボンコピー資料I」二七、二八丁目）

佐与松 十八エ。十八へえ？（意外なる林部の言葉を、不審さうに見上げる）

林部 おれは昨「田」「朝」、忠次の先妻お豊なる者を招き寄せ、懇々と申含めた上に、かねて仕込みし毒酒を一壺、かのお豊に与へてあるのだ。その方ども、見て知つてゐる筈だ。

佐与松 はい、存じて居ります。が、彼も一度は忠次に連添ましたるだけあつて、見かけよりは「■」「性根」がすはり、強いところのある女でござります。殿様の御思召通り……果して忠次に毒酒をす、めましたやら、又忠次も、うツかり油断いたして、「お」「そ」の毒酒を飲みましたものとも……、私には、はつきり判断がつかかねます。

■の部分は立心偏を書いて「良」と書き誤つて修正したもの。佐與松の二つ目の科白「連添ましたる」は、筆耕により「連添ひましたる」と直されて初出に反映された。字句の細かい修正が多いが、青果は漢字表記をひらがなに直している点もよく見られる。

引用14【直筆資料】（「カーボンコピー資料I」二八、二九丁目）

林部 《前略》 林部がお豊にあの毒酒を渡したのは、女は必ず林部の言葉通り、「■」「昔」の夫たる忠次に、それを飲ませるものと信じてゐたとも思ふのか。これは、これは——、は、は、は、は、。林部を、情ないほどの案足あんたらすに致し居るわ。は、は、は、は、。

権田（驚き、進みて）では、殿様。彼女に毒酒をお預けなされましたのは、何か他「か」「へ」……御「十」「思」案、御差略ごさりやくがあつてのこととござりまするか。

《中略》

林部 わしは明かに彼に、毒酒であることを示してゐる。彼女の人情として、それを忠次に飲ませ得ぬことも知つてゐる。が、忠次を初め一家の者どもは、家を捨て妻子を捨て、既に一月近い山籠りのために、みな感情は「十」「昂ぶたかり、十八へたかぶり」気が苛立ちて、心も急あせりゐるところだ。

《後略》

■の部分は漢字の書きかけであるが画数が少ないため判読できず。同

じ科白の「案足らす」は筆耕により「案足らず」と修正された。林部の二つ目の科白は長いものであるが、《後略》以降は修正されていない。

引用15 【直筆資料】（「カーボンコピー資料I」二九、三〇丁目）

林部 絶所に「逐」追 詰むれば、鹿もまた狼のごとくなる

と云ふぞ。赤城山に籠つた忠次一家は、絶所に追はれた鹿も同前なのだ。われ等よりも攻むるに難いが、彼等にも又遁ぐるに難き難所なのだ。若し四方より力攻めに攻めたつれば、彼等も又必死の死力をつくして、切つて出づに相違ないのだ。それでは双方に怪我人ばかり多く、追討の御用は「■」の功をなし難いのだ。前云ふ絶所の鹿の話ちやが……、老練なる狩人は、然やうの時は必ず包囲の一方を「説」解「き」へき、鹿の目の前に青葉の枝を山のやうに投げ与へて、背後の方より空「砲」鉄 砲を放つといふ「ふ」と

■の部分は漢字の書きかけで「功」もしくは「攻」に見えるが不明。同じ林部の科白「切つて出づに」は、筆耕者によって「切つて出づるに」に直されている。長い加筆箇所「投げ与へて」は「投げ与へて」に直された。引用箇所はちょうど【直筆資料】のなかで欠落しているところであり、末尾以降はなく、三二丁目の一行目の「違ない」に続いている。

引用16 【直筆資料】（「カーボンコピー資料I」三二、三三丁目）

林部 《前略》は、は、。《芸者の酒をうけつ、得意らしへさう》にカラくと笑ふ

権田 それでは、昨夜忠次が赤城山を引込みましたのは、かの毒酒一条の効「■」めでござりましたか。

林部 いや、百が百までそれのみとは思はんがな、忠次の心緒に非常の動揺が与へられてゐることだけは、察するに難くない。大洞の小屋に火をかけて、既にはや遁げ足になつてゐると云ふから……、先づ、大体は……わが術策のうち陥つてゐるのだ。佐与松、人間これで、必死の決心ほど強いものはないぞ。「不」不図わが「必」必死とはわが身「を」へ「の」「■」存 在を忘れることだ。その時人間ほど恐しきはないものだが……、不図考へ直して、遁げやうか或は幸に遁げ得られるかも知れぬ「ぬ」へなぞと、自分の存在を顧みる心が起れば、その時その者は、実に意気地もなく「勇」氣「力」が「沮」喪してゐるものなのだ。わしがお豊を誘つて毒酒を送つたのは、忠次の鉄石心を惑はして、彼に動揺を与へ、自分の体について考へさせたためなのだ。「果」して彼は考へは、は、。彼は果して考へたよ、果して彼は迷ひはじめたのだ。《後略》

権田の科白中「引込みました」は、カーボンコピー資料では「引振ひ

ました」と誤記されたが、初出では「払」に修正されている。一つ目の■は途中まで書いてあるが「験」に見える。二つ目の■は鍋蓋のみ記されているが不明、三つ目の■もおそらく漢字であろうが、途中で書くのを止めており読めず。同じ林部の科白「不図考へ直して、遁げやうか」はカーボンコピー資料では「不図考へ直して、遁げようか」となり、そのまま初出もこの表記になった。その下の「遁げ得られるかも知れなぞ」とは「ぬ」が抹消されたために意味が通らなくなっているが、清書では「ぬ」を補っている。

引用17【直筆資料】（「カーボンコピー資料I」三二～三五丁目）

権田 《前略》 恰も虎を平野に放ちまするも同様にて、今後はその搜索も一方ならぬ難儀でござりませう。

《中略》

林田 徳川家の掟は重いぞ。関所破りは国家の大禁、獄門磔の大罪に問はれるのだ。「わし」忠次はその大禁を犯してこそ、初めて日■本国中に身の置所なき大罪人となるのだ。

権田 （その真意を解しかねて）え、何んと仰しやります。

林部 忠次の罪状は、上州一国の科（罪）人とし■のみ
の罪科人となし置くには、余りに重く、重く余りに
憎い。わしは彼を日本全国の罪人として、彼を憎みたい、
彼を罰したい。江戸（御）政（府）の威令の行はる、

ところ、津々浦々のはて迄も、彼の身を置くところをなからしめたい。会津へ遁げても、信越へ出て、同じくこれ日本国中だ。彼は（が）流浪して一夜の宿りを求むるところ、彼が立寄つて一時の雨をしのぐところ、みないづれも彼を追ふ犯罪地なのだ。彼には今日只今より、一步として安心の時なく、一時として休息の場所がなくなるのだ。永久に追はれて永久に遁げる、彼は天下の罪人になつてゐるのだ。は、は、は、。女（女）よ、注げ！

修正が多くない箇所なので三二～三五丁目の部分を整理した。《中略》直後の「林田」は誤記だが筆耕者によって「林部」に直された。また「難儀でござりませう。」「永久に遁げる」と濁点を補っている。一つ目の■は国構えを書こうとして抹消している。二つ目の■は平仮名に見えなくもないが、はっきりしない。

引用18【直筆資料】（「カーボンコピー資料I」三五、三六丁目）

権田、佐与松、互に顔を見合はせて驚きある時、
近侍（手廻り）の侍（若）侍谷川某入り来る。

谷川 は、御支配さまに申し上げます。

林部 谷川か、御苦勞々々。様子は何うであつた。

谷川 須坂すざかの源兵衛が唐丸籠あんなかは、さき程安中あんなかを通行いたしました。「故」へゆゑ、追付け当前橋に着いたす模様にござります。

林部 待ちかねてゐたのだ。直ちに唐「■」へ丸籠を切りほ
どき、罪人須坂の源兵衛をこれへ呼び出せ。

谷川 (意外「に驚」への言葉)に驚きつゝ、)は? かの江戸送
りの大罪人を、籠より引出すのでござりまするか。

谷川の二つ目の発言「前橋に着いたす」は【直筆資料】から初出まで
変わらず、初出では「着いたす」とふりがなが付けられている。また林
部の二つ目の科白には直筆原稿には句点(。)が就いているが、カーボ
ンコピー資料では付けられず、初出では再び付けられた。

引用19 【直筆資料】(「カーボンコピー資料I」三六丁目)

林部 江戸表御係には「最申」へもは)や願濟みになつてゐる
のだ。彼をゆるして忠次逮捕の一役を「勤」つとめさせ
るのだ。連れて来い。

谷川 はい……。 (権田と顔を見合せて当惑してゐる)

林部 何を躊躇してゐるのだ。わしにはわしの思案がある。急
ぎ源兵衛に髪月代かみつきやきを致させ、懇に「捲」へ扱)つてこれ
へ呼べ。忠次の無法を制するには、彼源兵衛の無法を働
かすより外はないのだ。連れて来い。

《中略》

権田、佐与松「は互に顔を」へは怪訝さうに) 林部
を見る。林部、得意さうに大笑して……。 (幕)

第一幕の末尾の場面である。引用13にも記したが、すでに漢字で書いたものを平仮名に直している様子がここでもわかる。

以上、ここまで引用1から引用19まで整理したが、これが【直筆資料】に見られる加筆修正箇所すべてとなる。物語内容に直接影響するようなものはなく、細かい修正が主になっている。

六・小括

本稿は真山青果が「国定忠次」の続編として構想し、第一幕を公にしたものの途中で内容を変更するに至った「国定忠次(続編)」について考察してきた。前半では掲載誌の情報を整理し、『富士』に掲載されたまま現在では本文が普及していないこの作品の内容を紹介しながら、作品の特徴や後の展開の布石になっているいくつかの要素を指摘し、わずかではあるが「続国定忠次」との関わりについても言及した。後半は「真山青果文庫」所蔵の【直筆資料】における青果自身の修正箇所を引用して点検した。直筆資料の修正箇所は、第五節でも触れたように目を引くような大きな修正はなく、細かい表現のみの修正がほとんどである。修正のみならず書き損じまで引用したので、あるいはそこまで検討する必

要があるのかという疑問を持たれるかもしれないが、青果の直筆原稿を目の前にして、これを研究報告にまとめる時、青果の直筆原稿のなかにどう修正が入っているのか、またどのような文字を書こうとしていたのかについてもできるかぎり詳しく情報を残しておいたほうが良いと思っているので、煩雑であることは承知しながら引用した。青果研究はまだまだ初期段階であるが、いかなる情報が今後役に立つかわからないので、あまり余計な省略はせずに書き抜いた。

また青果の「国定忠次」その他、上演するために書かれた作品全般に言えることであるが、直筆原稿を筆耕者が清書し、その際カーボンコピーによってその清書を複数部作成するという手続きを取っているため、清書の段階においても本文に様々な変更が入り込んでいる様子を確かめることができる。稿者の手許には、調査で収集した各資料（「直筆資料」と「カーボンコピー資料（Ⅰ）（Ⅱ）」の画像）と、初出の『富士』の本文のコピーもあるので、各資料がどのような過程を経て初出の本文になったのかをたどることはできるのだが、【カーボンコピー資料】から初出の本文における異同もわずかなが見られ、その部分についてもこの後に行う本文の翻刻において反映してある。本稿の第五節と末尾の翻刻を参照すればそれらをたどることができる。ただし【カーボンコピー資料】から初出への変更が青果の校正によるものかは異同を見た限りではわからない。

資料の制約もあり、不明なことが多い作品ではあるが、まずは「国定忠次（続編）」を広く知ってもらい、少しでも真山青果の研究に資する

ことができればと思っている。

〔注〕

- (1) 前稿と同様に実在の人物は「忠治」の表記を用い、真山青果の作品に登場する人物は「忠次」と表記する。
- (2) 「国定忠次」（三幕六場）は歌舞伎座にて昭和七年七月一日から同月二五日まで上演、「続編国定忠次」（四幕）は東京劇場にて同年一月二日から同月二六日まで上演された。
- (3) 『真山青果全集』第五卷、大日本雄弁会講談社、昭和一六年三月。この本文に「解題」と「備考」を新たに付けた復刻版が昭和五一年七月に刊行されている。
- (4) 『真山青果青果研究』（『真山青果全集』別巻一、講談社、昭和五三年七月）に所収。野村喬による編集。
- (5) 『近代文学研究叢書』第64巻、昭和女子大学近代文化研究所、一九九一年四月。
- (6) 野村喬「評伝真山青果」リポート、一九九四年一〇月。本書の「真山青果著作年表」は注4と同じものであるが、ここでも先の誤りは修正されていない。
- (7) 本稿は関西大学図書館所蔵の『富士』を参照した。
- (8) 少し紛らわしいので整理すると、『富士』に掲載された際の題名は「国定忠次」であるが、上演時の東京劇場の広告や関連記事を見ると「続編国定忠次」となっている。なお、青果の直筆を筆耕者

が清書したカーボンコピー資料も「続編国定忠次」とある。

- (9) 大貫俊彦「真山青果「国定忠次」関係資料をめぐって―草稿資料の検討から見える本文の生成過程と執筆方法―」『調査研究報告』第42号、二〇二二年三月。

- (10) この挿絵の形式は、九月号の冒頭「第二幕」、一〇月号の「第四幕」も同様である。ただし「真山先生のプランによりて」の文言はなくなる。

〔付記〕

本稿は星槎グループ「真山青果蔵書研究助成事業」による研究成果である。本稿を執筆するにあたり、資料の閲覧・撮影ならびに掲載について星槎ラボラトリーより、また初出誌『富士』の本文の複写については関西大学図書館にご高配を賜りました。末尾に記して感謝申し上げます。

〔追記〕

本稿の校正中、研究部青田寿美先生の訃報に接した。青田先生が私に星槎グループ所蔵資料の調査員にならないかとお声をかけてくださったからこそ、青果の関係資料の閲覧が可能となり、『調査研究報告』の一連の研究成果が生まれた。青田先生の間までのこれまでもお心づかいに深く感謝するとともに、心からのご冥福をお祈り申し上げます。

真山青果「国定忠次（続編）」本文の翻刻

〔凡例〕

- ・底本は「真山青果文庫」所蔵の【カーボンコピー資料Ⅰ】を用いる。この資料には加筆箇所がなく、『富士』の本文と（わずかな字句の修正と初出が総ルビであることを除いては）ほぼ同じである。初出との異同は、【】で表記する（墨付き括弧の中が初出の表記である）。
- ・翻刻にあたり漢字は原則として通行の字体に直す。ただし登場人物（具体的には「三室の佐與松」の名前は元の表記とする）。
- ・底本にはわずかにふりがなが付けられているが、そのまま翻刻する。
- ・句読点、濁点、各種符号なども底本の表記をそのまま翻刻する。
- ・本文にはわずかながら筆耕による筆記ミスが見られるが、そのまま記載する。
- ・翻刻にあたり、【カーボンコピー資料Ⅰ】の丁数を新たに付ける（「一」のように表側の開始箇所のみ表記する）。

国定忠次（続編）

第一幕

上州前橋連雀町油屋勘兵衛の店頭。油屋は当時に名高き旅籠屋にて街道の脇本陣となり、今恰も板鼻代官林部三右衛門の宿陣となりぬる。

舞台の装置は、中央より上手半分を油屋の見世さきとなし、下手の半分は板塀に囲まれた冠木門ありて内玄関への通路となる。門内の内玄関は植木にさへぎられて仔細には見えざれども、門前には陣幕を張り、高張提灯を出し、御代官宿泊の関札を出すのみならず、門内通路には水手桶を積み刑具兵（「二」）具やうのものを飾り立て、警備を厳重にするるとともに、その光景いかにも威嚇的にみゆる。

上手の見世さきは普通名所図会などに描かる、宿駅旅人宿の構造にて、家屋は漆喰塗腰壁にてつ、まれ、長暖簾をさげたり。店の前面はひろき土間にて、その中央より中戸暖簾口を通りて奥にかよふ通路の土間があるため、店頭は自然二つの部分にしきられる。下手の畳敷は帳場にして客応対の腰掛座敷となし、帳場格子、書状さし、戸棚その他の装置あり。上手の部分板敷の落間にて、時には荷造り場、

貫目改め所ともなり、昼間は飯盛女（出女ともいふ）の休息所となる。菰包みの客荷物などを壁際に積み置きたり。

〔三丁〕

時は天保八年の秋八月十六日頃の夕暮時。即ち前記のごとく国定村忠次の一党が赤城山中に立籠りて、関八州の代官所役人の攻撃をうけつゝ、ある最中のこと。

板鼻陣屋代官林部三右衛門は無宿渡世忠次のために襲撃せられて、代官所を焼かれたるのみならず、御蔵をあばいて米穀を掠奪せられ、職掌上の威信地に墜ちたるため、江戸幕府に願うて関東諸代官所の援兵をうけて、三方より赤城山を包囲して忠次逮捕につとむると雖も、暴徒等の防備もまた嚴重にして容易に手を下しがたき状況にあり。已を得ずこの前橋油屋を討手の総本営と定め、諸方の往来を改め、賊徒の糧道を断ち、忠次等の来り降参するを待ちゐるなり。

〔四丁〕

幕明く——代官所手附下役三名（石岡某、清水某、天田某）いづれも嚴重なる出役姿にて本営を警備し、出動の指令を待ちゐる。店の落間には飯盛女おはん、お吉、往来に向けて鏡台を持出し、肌ぬぎにて夕化粧をいそぐ。当時において飯盛女の見世化粧は道中景物の一つとせらる。

おはん（髪を直しながら、歌ふやうに通行人を呼ぶ）これく上りの衆、

宿をとるなら泊らんせ、お泊りなんし、泊らんし。

お吉 これ馬子どの、その馬これへ着けさッしやれ。丁度座敷もあいてゐる、風呂も今が上加減ちや、これ馬子どのく。

石岡（女どもを睨め）え、騒々しい、客を引くなら表へ出ろ。

お吉（ツンとして）これが私どもの、稼業で〔五丁〕ござります。

石岡 何が稼業だ。飯盛ども。話の邪魔だ、あっちへ行け。

おはん（フンとして、小声に）へん、貧乏神！

石岡 何？

お吉 いえ、何んでもない。どうでこちと等は、軽井沢手前の化物ばいたでございますようだ。（唇など突出す）

おはん、お吉、プリくしながら去る。

清水 ちや何かの、石岡。（石岡に）昨夜は藤岡辺の百姓どもまで騒ぎ出したといふのか。

石岡 巨細のところは判りませんが、先刻の炭つけ馬の噂では、どうも実説らしく思はれます。

清水 困つたことだな。こりや増々火の手が延びさうだ。

天田 一日の油断は、一日の手遅れになりま〔六丁〕せう。

石岡 高崎藩は何をしてゐるのだ。今以て人数を繰出す模様も見えないが、それちや初手の約束と違ふ。

清水 いや、それは此方様から使者を立て、一時出勢見合せるやうにと、わざと、頼み込んだためであらう。

天田 出勢見合せと云ひますと……？

清水 御支配様としては、今度の騒動は御自分支配地の出来事ゆゑ、他藩他勢の力を借りては、後々とも代官所の威光にも関はると思召さるゝのであらう。なるべくは一手限りに忠次を召捕り、御自分の功名を立てらるゝ、覚悟らしい。

石岡 それならばそのやうに、尽す手段が外にありませう。一月近くも赤城山を取巻き、便々として忠次の降参を待つたところで、いつ埒が明くとも思はれない。

天田 関八州の代官所役人が集つて、高が無〔七丁〕宿者の忠次一人を御用弁にしかねるとは、御上の御威勢にもかゝりませぬか。

清水 それは吾々も考へるところだが……、御支配様には又何か御目算があらツしやるのだらう。

石岡 御目算があれば結構だが、今日のこの為体でいつその御目算が形になるのか……、まことに心細い次第だ。は、は、は、。

天田 一日々々と百姓どもの氣勢が鋭くなるのを、御支配様は何んと御覧なされるのだらう。

石岡 昨夜も大胡村初め百姓どもが、忠次命乞ひの嘆願に罷出ながら、その態度はまるで脅迫でござつた。

天田 農民等はもはや御上を侮りきつてゐます。打捨て置いたら……、今に大變が生じませう。

清水 (嘆息して) 実に、困つた御時勢だ……〔八丁〕……。飯盛女おはん、他の下女お林と共に、酒肴をはこび来る。

おはん (先刻の余憤にブンとしつゝ、) 下されものだ、召上らツしやい。

石岡 下され物？ 何んだ。

おはん 毎日の詰方御苦勞だ、一つあいつ等にも飲ましてやれと、御代官様のお差図なんだよ。

石岡 (むツとして大声) あいつ等とは何んだ。あいつ等とは――。

おはん わしが云つたんぢやねえ。御代官様の仰しやる通りを云つたのだ、なアお林どん。

天田 こいつ等、われ、を馬鹿にするか。

お林 あれ、誰が馬鹿にしたよう。奥の御頭様かはツきり然う言しやツたのだ。

石岡 (睨みつけながら) うぬ、もう一度云つて見ろ！ 幾度だつて云ふよ、なアお林。(平氣〔九丁〕)で顔を見合せ目くばせして) 毎日の詰方御苦勞だ、一つあいつ等にも飲ましてやれと……。

石岡 何、何？

おはん あれ、この人はまア何を怒るだよ。御代官様がお前様方を、あいつ等と云つたのが、いけないのかねえ。

お林 それぢやお頭様に、然う申上げようかの。

石岡 え、勝手にしろ！

清水 (石岡を抑へつゝ) これ、静かにしないか。

に打捨て置いたら何うなると思ひます。

清水 困つた、困つた……。

天田 困つた、ぢやない、御頭様に御思案を願はずばなりますまい。

〔一〇〕

石岡 清水氏、何うなさる、！

清水 たゞ最う困つた……、困つたことだ……。

同じく代官所書役宗川某、手代下役横田某外二人と共に、

狼狽して走り来る。宗川某は百姓等に胴上げせられて、衣

服も取みだし頭髪なども散々にくづれ〔一〕ゐる。

宗川 (手を振り息をきらして) 可けませんぞ、至急御手当なさ

らんと可けません。こりや、騒動になります。

清水 (驚き立寄り) 何んだ、宗川。何が起つたのだ。

宗川 (川筋を指差し) あれ、今あれから天狗組が押寄せます。

早う御手配なさらんと、段々人数が殖えるばかりだ。

清水 天狗組——？ 天狗組とは何んだ。

宗川 仮面をかぶつてゐるのでハッキリ分りませぬが、いづれ伊勢崎

近在の百姓どもに相違ありません。板鼻御代官所に〔一〕嘆

願の筋があるとして、徒党を組んで参ります。

清水 怪しからん——！ それ〔二〕石岡、天田、用意さツしやい！

宗川 いや、小人数ではお危なうござります。表面は嘆願など、

殊勝らしく申して居りますが、一同みな殺氣立つて居ります。

現に手前なども、取鎮めようと致しますと……、前祝の胴上

げぢやとて、このやうな目に遇ひました。至急高崎勢の御繰出しを願ひます。

この時、下町の方にて竹法螺の音聞え、どツと鬨の声をあげる。

清水 そして人勢は、凡そ何程だ。

宗川 今のところは五六十人に過ぎませぬが、追々走加はる者がござ

ります。御油断はなりません。

清水 石岡。兎に角同心組を集めさツしやい。鉄砲が十挺、お長物十人、

あの四辻を足溜りに、一人も通行を許してはな〔二〕らん。

石岡 承知しました。まさかの時は打放しますか。

清水 いや、そりや為らん、為らん。空鉄砲三発までは許しますが、

その以上は下知を待たツしやい。

石岡、天田、上手なる同心下宿の方に駈出す時、下手の方

より群衆の声騒がしく、天狗組次第に近づき来る。油屋う

ちよりは詰合の下役人二三人走り出て、清水の下知をうけ

て防備の用意をなす時、農民等の一行殺氣立ちて押寄せ来

る。その人数凡そ四五十人、多くは玩具の張貫天狗面にて

顔をつ、めども、中には狐又は塩吹など有合せの仮面をか

ぶり、仮面なき者は白手拭その他にて面体をつ、みゐる。

服装は簑笠もあり野稼ぎ姿もありて思ひく、なれども、み

な手〔三〕頃の竹杖弓の折などを持つ。

一同の指揮者としては青天狗、赤天狗の兩人先頭に立つ。

この両人は服装もキリ、と整ひ、金輪入りの半棒を杖につき、天狗面も木彫りの古雅なるものを用ゆ。一同は先頭二人の指揮をうけて油屋の玄関口に殺到せんとする。清水等の諸役人は門前に立塞りてそれを防ぐ。

清水 これ一同、いづれへ参るのだ。止まれ、止まれ！

赤天狗 内願の筋あつて罷出ました。胡乱の者ではござりませぬ。

青天狗 邪魔だてなされると、お身様だちの御損だ。退かッしやれ。

赤天狗 青天狗共に言葉は穩かなれども、語氣は鋭く、極度の敵意と侮蔑の情を含みある。

清水 これ、心得違ひをしちやならぬ。願事〔丁四〕などあらば、取

次ぎも致さう。退がれ、人数を組めば徒党となり、その方共の不為めになる、退がれ。

赤天狗 徒党？ 徒党などとは思ひも寄らん。は、は、。

青天狗 人は集つても、みな銘々一人づつ、自分の訴訟に罷出たのだ。

お前様だちこそ、退かッしやい。

清水 さらに何故、異様なものに面体をつゝむのだ。

赤天狗 この仮面か。は、は、。こりやお前様だちの役目をたて、御上にしくじりのないやう、わざとこちと等の面をつゝんでゐるのだ。

清水 何——？

青天狗 近郷三郡の百姓どもは、もはやお前様だちの言葉を信じないのだ。この仮面をはずして一々道理を責立てられたら、お前様だ

ちの役儀も立ちますまい。は、は、。〔丁五〕

赤天狗 触らぬ神に祟なし、引込んでござる方が好からう。は、は、。

清水 その方共は、忠次の命乞ひにでも参つたのか。

青天狗 命乞ひとは科人に云ふ言葉だ。忠次どんには科はねえ。

赤天狗 忠次どんの為ッしやつたことは、上州一円百姓どもの念願なのだ。忠次どんを攻めるなら、百姓一同を責めさッしやい。

青天狗 国の掟も御仕置も、民百姓があつてのことだ。国中青草の根を

枯らして、何が御代官だ、お役人だ。

赤天狗 忠次どんを殺さば皆殺せ、百姓ども皆殺せ！

群集一同も同音に声を上げ、「殺せ、皆殺せ。」など殺

氣立ちて叫び、一同門内に闖入せんとする。

清水 これ心得違ひをしてはならん。嗚訴の罪は重いぞ。〔丁六〕

宗川 罪人を出してはならん。嘆願は取次ぐ、さあ引け。

清水、宗川、他の下役等と共に制止すれども農民等は聞かず、門前に殺倒して相争ふ時、上手の同心組の方より四五発の砲声聞ゆる。農民鉄砲の音に驚き「そら鉄砲だ」一怪我するな「一撃たれるな」など口々に叫んで一時は散々に逃げ出したれど、そのうちに一人二人不審さうに立止まる者あり、上手同心組の情勢より察して威嚇の空鉄砲たるを察したるなり。

宗川 さ、引け、引かッしやい。必ず悪うは計はない。

清水 嘆願の筋はわれ等より取次いで、必ず御支配様の御耳に入れよ

う。怪我があつてはならぬ、一同引けく。

赤天狗 (一度遁げたるを戻り来り、青天狗に) 今のは、空鉄砲か。

〔一七〕

青天狗 うむ、嚇しの空鉄砲だ。役人どもの腹は知れてるぞ。

赤天狗 (大声に) 遁げるなく、みな引返せ。今のは嚇しだ、案山子

鉄砲だ。返せく、引返せ!

青天狗 相手の腹は読めてるぞ、みな引返せ、戻せ!

群集空鉄砲と聞いて急に元気づき、わつと叫んで引返し来

る。宗川、清水その他、声を嗶らして制止すれども、農民

等は図にのりて聞かず、油屋の店頭又は冠木門より家内に

侵入せんとして乱闘する。石岡、天田等の率ゆる鉄砲組は

その暴状を見かねて駈け来り、道路に折敷いて筒先を暴民

等に向ける。

石岡 引けく、一揆ども。引かぬと撃つぞ!

青天狗 撃てく、撃て! 腰抜け役人の鉄〔一八〕砲を恐れて、忠次

どんを見殺しになるか。

赤天狗 うぬの引く引金は、うぬ等の顎を狙つてゐるのだ。

青天狗 おれ等一人の血を流せば、つゞいて三郡の百姓が奮ひ立つのだ。

赤天狗 引かれるものなら、その引金を引いて見ろ!

同心組、百姓等の劍幕に驚きて手を下しかねてゐる所に、

烏山御代官竹垣次郎左、乗馬を走らせ駈け来る。次郎左、

二十七八歳、眉目清秀の若侍なり。半付半被の口取馬丁そ

れに随ふ。

竹垣 (馬上より大声) これ、街道を騒がして何事だ。鎮まれ、鎮まれ、

陳状があらば聞届けよう、一同鎮まれ、皆鎮まれ!

赤天狗 (竹垣を見て) お、烏山の御代官様……。〔一九〕

青天狗 騒動ではござりませぬ、御願の者でござります。

群集一同も竹垣を見て、や、乱暴を差扣ゆる。

竹垣 例へ嘆願にもせよ、人数を組めば不逞の罪に陥るぞ。支配違ひ

ながら竹垣が参り合する以上、決してその方共の念願を疎略に

は聞かぬ。条理をもつて訴出づれば、条理をもつて聞届け得さ

するぞ。上の御慈悲は広大だ。騒ぐな、鎮まれ、云へ、聞か

ふ。

竹垣、ヒラリと馬より飛下りて中央の床几に腰掛ける。百

姓等は互に囁き合つて、何か相談する模様なりしが、やが

て惣代三名を選びて怖々と竹垣の前に進み出て、顔をつ、

みし仮面を取らんとする。

竹垣 いや、苦しくない、その俣く。決してその仮面は取るな。竹

垣も小人、人間としてその方共の顔を見れば、或は〔二〇〕愛

憎の念を生じて、依怙のさばきを致すかも知れぬ。人道非なれ

ば天に声あつてこれを戒むると聞く。竹垣はそち等の言語を先

づ天の声として聞きたい。決して仮面を取るな。

一同平伏して竹垣の態度を感謝する。

竹垣 偕て、聞かう。(床几を進めて) 決して遠慮はない。思ふま、

に条理を述べよ。進め、進め。

一同平伏する。

——（道具廻る）

その二

同じ油屋の奥座敷。八畳に十二畳ほど二室つゞきの広座敷。書院づくりの本陣らしき建築にて中庭に對ふ。正面床間には鵬齋らしき大幅の軸をかけ、棚飾りも相応し、「丁二」金屏風など置けるさま、小大名の宿陣らしく見ゆ。縁側あり、上手は店頭に通じ、下手に鉢前の石あり。

道具廻り来る——室内には杯盤狼藉と取散らし、代官林部三右衛門は町芸者など集めて、午後よりの酒宴に耽りたるさまなり。用人権田陸太郎、五十二三歳、当惑さうなる姿にて闕際に座し、前場にも出たる三室の佐與松（目明し）中庭の縁側に腰掛ける。佐與松は足拵へも嚴重に出役姿なり。

時は薄暮。座敷に林部の姿を見ず、町芸者【の】お袖に手水鉢の前に手拭を持ちて立ち、女中お吉は取散らしたる膳部※は初出で削除など片付ける。

佐與松（空合を見上げ）最早や日が暮れます「丁二」……。御用人様、

何んとか御下知を願上げます。

権田 佐與松。おぬしも見る通りで……、いかんとも困つたよ。

佐與松 然しこの場合……、忠次が万一、野州なり信州路なり国越えを致しましたら、それこそ御支配様の御手落になりませう。御油断は時にもよると存じます。

権田（進み出て）忠次は慥に、昨夜赤城を引払つたに相違ないな。

佐與松 へえ、間違はござりませぬ。かねて入込いりこませて置きました箕輪百姓の注進もござりまするし、大洞の本陣に火をかけて焼払つたのが何よりの証拠で、昨夜深更に裏山越えを致したものと思はれます。

権田 致すと——、道順は深山越えだが、今もつて沼田よりも渋川よりも、それらしい注進が参らぬが……。〔丁三〕

佐與松 いや、ノソく、街道筋に顕はれるやうな忠次ではござりませぬ。又、百姓衆の味方もござります。昨夜のうちに街道を越えて、子持山に入込みましたか、それとも榛名を山越えするか、いづれにしても今日一日は、近辺の山中に隠れひそんであるものと思はれます。権田様、追討は今のうちでござります、今宵を過ぐしましては彼等の距離が伸びて、もはや取返しのかぬことになりませう。

権田 それはわれ等も考ふるが……、何うも困つたものだ。

用人権田、当惑さうに思案する時、代官林部三右衛門、下手の縁側に姿を顕はしお袖の柄杓にて手を洗ふ。元來この

林部はわが才能に誇りて、他人が諫むるほどそれを聞かず、

わが智謀をもてあそぶ性癖ある人なり。〔二四〕

林部 佐與松。まだ小田原評定か。は、は、。さ、上つて酒の相伴

でもせぬか。(芸者を見て) お袖も今夜は、少し自暴なことがあつて……、ペロ／＼の神様を踊るさうだ。は、は、。なあ、お袖。

お袖 え、私……知りません。(林部の肩を打つ)

林部 は、は、。さあ権田、おぬしも附合んか。板塀に描いた天神様のやうに然う鯉子はつては、今にその四角な面が、縫目から綻びがきれるぞ。は、は、。

佐與松 殿様、慮外ながら……然やうの場合ではないと存じます。

林部 忠次の一条か。あれは最早や御用便も同様だ。打遣つて置け、は、は、。(座り、盃を取り) お袖。

芸者お袖、酌をする。林部は権田等の屈托顔を見くらべて、面白さ〔二五〕うに酒を飲む。

権田 殿様。(一膝進出で、) さき程、竹垣様がお帰り際の御一言、御上には何うお聞き遊ばしますか知れませぬが……。

林部 竹垣の言葉? は、は、。ありや未だお若い。は、は、。御代官学の雛形通りになぞつてござるのだ。あんなことで、撫民の御用が勤まるものぢやない。は、は、。

権田 然し竹垣様の御出張がなければ、さき程の天狗組もあの仮には引取りますまいと存じます。農民等は今、意外に激越いたして

居ります。

林部 それだから斯うして飲んでゐるのだ。お前達には分らん。は、は、。打遣つて置け。林部は今日昨日の出来星御代官ぢやないのだ。竹垣ぐらゐの鼻先学問で、生きた百姓を治められるものぢやない。

佐與松 忠次の始末は如何致しませう。〔二六〕

林部 そりや忠次当人の腹次第だ。遁げやうと走らうと、それは彼のこと、林部の知つたことぢやあるまい。

権田 忠次一家の者が、万一にも他領他国に落のびましたら、御公儀様に対し、殿様の落度等には相成りませぬか。

林部 いや、決して相成りません。は、は、。苦勞致すな。

権田 然し——。

林部 煩さい男だ。(少しむツとして) 林部は林部の器量をもつて、

四万何千石の御領をお預り致してゐるのだ。そち達の下知は聞かん。差出がましい口はきかぬが好い。

権田 はい……。

林部 佐與松。智慧の足らぬお前などに、聞いても詰らぬ話だが、忠

次が昨夜になつて急に大洞の小屋に火を放ち、一家一党を集めて赤城山を下つたのは、何んのためと思ふのだ。兵糧が尽きた訳〔二七〕でもない、又彈藥の尽きた訳でもないらしいのに、何故に急に慌てふためいて、昨夜深更に山を引払ふ決心を致したのだ。考へたいなら先づその辺から考へ出して見ろ。

佐與松 へえ？（意外なる林部の言葉を、不審さうに見上げる）

林 部 おれは今朝、忠次の先妻お豊なる者を招き寄せ、懇々と申含めた上に、かねて仕込みし毒酒を一壺、かのお豊に与へてあるのだ。その方ども、見て知つてゐる筈だ。

佐與松 はい、存じて居ります。が、彼も一度は忠次に連添ひましたるだけあつて、見かけよりは性根がすはり、強いところのある女でござります。殿様の御思召通り……果して忠次に毒酒をす、めましたやら、又忠次も、うっかり油断いたして、その毒酒を飲みましたものとも……、私には、はツきり判〔二八〕断がつかねます。

林 部 こいつ――、は、は、は、は、（膝を叩いて面白さうに笑ふ）では何か、は、は、は、。林部がお豊にあの毒酒を渡したのは、女は必ず林部の言葉通り、昔の夫たる忠次に、それを飲ませるものと信じてゐたとも思ふのか。これは、これは――、は、は、は、。林部を、情ないほどの案足らずに致し居るわ。は、は、は、。権 田（驚き、進みて）では、殿様。彼女に毒酒をお預けなされたのは、何か他に……御思案、御差略があつてのこととござりまするか。

林 部 わしは只、忠次の心中に動搖を与へたかつたのだ。

権 田 え、何んと仰せられます。

林 部 わしは明かに彼に、毒酒であることを示してゐる。彼女の人情として、それを忠次に飲ませ得ぬことも知つてゐる〔二九〕。が、

忠次を初め一家の者どもは、家を捨て妻子を捨て、既に一月近い山籠りのために、みな感情はたかぶり、気が苛立ちて、心も急りゐるところだ。そこへ忠次の古女房なる者が、七里の山路をのぼり来つて忠次に面会を求めたとする。この一事だけでも、忠次の心は動揺するのが人情だ。しかもその女が携へる酒は、忠次を殺すための毒酒である。例へ女はその酒をす、めぬにせよ、又忠次がそれを飲まぬにせよ、その女を見、その酒を見て、忠次の心緒は動揺せずにはゐられないのだ。

権 田 御尤もにござります……。

林 部 絶所に追詰むれば、鹿もまた狼のごとくなると云ふぞ。赤城山に籠つた忠次一家は、絶所に追はれた鹿も同前なのだ。われ等よりも攻むるに難いが、彼等にも又遁ぐるに難き難所なのだ。若〔三〇〕し四方より力攻めに攻めたつれば、彼等も又必死の死力をつくして、切つて出づるに相違ないのだ。それでは双方に怪我人ばかり多く、追討の御用はその功をなし難いのだ。前云ふ絶所の鹿の話ぢやが……、老練なる狩人は、然やうの時は必ず包围の一方を解き、鹿の目の前に青葉の枝を山のやうに投げ与へて、背後の方より空鉄砲を放つといふことぢや。必死を極めし鹿のこゝろに動搖を与へるのが目的なのだ。わしが何うで飲ませぬものを承知しながら、お豊に毒酒を与へたのはその為めなのぢや。毒を飲むと飲まぬとは問題ぢやない。お豊を見、毒酒を見て、凝つと腕組みして思案に耽る……その忠次の心の

動揺がわしには大切であつたのだ。遁げる気になるか、或は切つて出る気になるか、いづれにしても忠次の思案は、その時波立ち動くに相〔三二〕違ない。わしはその動揺の機会を巧に利用する考であつたが……御年若の竹垣御代官などには、その工夫が工夫とも目に映らぬらしい。やれ小策を弄するの権謀のと、甚だ不満らしい口振りであつたが、彼の仁などには不満に見ゆるところが……些と、これでも、林部が思案を凝らしてゐるところなのぢや。は、は、は、。(芸者の酒をうけつ、得意さうにカラ／＼と笑ふ)

権田 それでは、昨夜忠次が赤城山を引振ひびりましたのは、かの毒酒一条の効きめでござりましたか。

林部 いや、百が百までそれのみとは思はんがな、忠次の心緒に非常の動揺が与へられてゐることだけは、察するに難くない。大洞の小屋に火をかけて、既にはや遁げ足になつてゐると云ふから……、先づ、大体は……わが術策のうちに陥つてゐるのだ。佐與松、人間〔三三〕これで、必死の決心ほど強いものはないぞ。必死とはわが身の存在を忘れることだ。その時の人間ほど恐ろしいものだが……、不図考へ直して、遁げようか或は幸に遁げ得られるかも知れぬなどと、自分の存在を顧みる心が起れば、その時その者は、実に意気地もなく氣力が沮喪してゐるものなのだ。わしがお豊を誘つて毒酒を送つたのは、忠次の鉄石心を惑はして、彼に動揺を与へ、自分の体について考へさせた

権田 い為めなのだ。は、は、は、。彼は果して考へたよ、果して彼は迷ひはじめたのだ。これで好い、これで好いのだ。は、は、は、。御言葉の趣は、御思案深くは考へられますが、然し山中に籠つた忠次なりやこそ、いづれ召捕にもなりません、山を出で、人家に紛れこみましては……、恰も虎を平野に放ちます〔三三〕るも同様にて、今後はその搜索も一方ならぬ難儀でござりませう。

林部 分からん男ぢやな、は、は、は、。赤城山の表口は諸役人の人数で包圍してある、遁げれば何うで裏山越しだ。渋川街道より外にはないのだ。は、は、は、。

佐與松 が、渋川に出ますれば街道は三又に分れて居ります。会津にも新潟へも、又長野街道を出れば信州へも遁げられませう。

林部 関所があるよ、は、は、は、。沼田口にも大戸口おほどぐちにも御上の御関所が設けられてゐるのだ。は、は、は、。

佐與松 然し関所と申しましたも……高が三五人の足軽が、御役目ばかりに番を致して居ります。無法者の国定一家の者ども、それを押破つて通るには何んの手間てま日間ひまがござりますまい。

林部 その方ども、まだ分らんか。は、は、は、。(少しく声音を改めて) 関所を破れ〔三四〕ば、忠次一家は関所破りになるのだ。

佐與松 へ？ 何んでござります？

林部 徳川家の掟は重いぞ。関所破りは国家の大禁、獄門磔の大罪に問はれるのだ。忠次はその大禁を犯してこそ、初めて日本國中

に身の置所なき大罪人となるのだ。

権田 (その真意を解しかねて) え、何んと仰しやります。

林部 忠次の罪状は、上州一国のみの罪科人となし置くには、余りに重く、余りに憎い。わしは彼を日本全国の罪人として、彼を憎みたい、彼を罰したい。江戸御政府の威令の行はるゝところ、津々浦々のはて迄も、彼の身を置くところをなからしめたい。会津へ通けても、信濃へ出ても、同じくこれ日本国中だ。彼が流浪して一夜の宿りを求むるところ、彼が立寄つて一時の雨をしのぐところ、みないづれも彼を追ふ犯罪〔三五〕地なのだ。彼には今日只今より、一步として安心の時なく、一時として休息の場所がなくなるのだ。永久に追はれて永久に通げる、彼は天下の罪人になつてゐるのだ。は、は、は、女よ、注げ!

権田、佐與松、互に顔を見合はせて驚きゐる時、手廻りの若侍谷川某入り来る。

谷川 は、御支配さまに申上げます。

林部 谷川か、御苦勞々々。様子は何うであつた。

谷川 須坂の源兵衛が唐丸籠は、さき程安中あんちゆうを通行いたしましたゆゑ、追付け当前橋に着いたす模様にござります。

林部 待ちかねてゐたのだ。直ちに唐丸籠を切りほどき、罪人須坂の源兵衛をこれへ呼び出せ。】

谷川 (意外の言葉に驚きつゝ) は? かの江戸送りの大罪人を、籠より引出すので〔三六〕ござりまするか。

林部 江戸表御係にはもはや願済みになつてゐるのだ。彼をゆるして

忠次逮捕の一役をつとめさせるのだ。連れて来い。

谷川 はい……。 (権田と顔を見合せて当惑してゐる)

林部 何を躊躇してゐるのだ。わしにはわしの思案がある。急ぎ源兵衛に髮月代かみさかやを致させ、懇に扱つてこれへ呼べ。忠次の無法を制するには、彼源兵衛の無法を働かすより外はないのだ。連れて来い。

谷川 はい。(走り去る)

林部 それ女ども、酒の支度だ、用意をしろ。信州で悪と呼ばれた須坂の源兵衛をもてなすのだ。皆そのつもりで用意をしろ。は、は、は、佐與松、おぬしも相伴したら好からう。は、は、は、

権田、佐與松は怪訝さうに林部を見る。林部、得意さうに大笑して……。

(幕)